

屈原

郭維森 著

日中出版



原書 屈原——中国古典文学基本知識叢書
著者 郭維森（かくいしん）
原出版社 上海古籍出版社

訳者 安藤信広（あんどう のぶひろ）
1949年1月2日 東京にて生まれる
法政大学文学部助教授
著書「漢文学」（法政大学通信教育部）
「日本文学辞典」（平凡社）共著

屈 原 中国古典入門叢書 IV

1984年9月30日 第1刷©

〈検印廃止〉

定価はカバーに表示してあります。

訳者	安藤信広
発行者	柳瀬宣久

発行所	株式会社 日 中 出 版
	東京都千代田区西神田1丁目3番6号 三崎町ビル
	振替 東京 5-186748 電話 03 (292) 8720・8721

編集・校正 安藤玲子
本文・カバー・表紙印刷 関ケイ・エム・エス

ISBN4-8175-1126-5 C1098

屈原

郭維森著

安藤信広訳

日中出版

凡 例

一、本書は、郭維森著『屈原』（上海古籍出版社・中国古典基本知識叢書）を翻訳したものである。原則として原著の体例に従い、表記の不統一とみられるものも甚しくない限りそのままとした。

一、原著者の注釈は、*印を付けて、段落の後に記した。

一、原注の中で必要の無いものは省略し、逆に原著者が注を施してはいなくても、日本の読者には注釈が必要と思われるものには、同じく*印を付けて注を記した。

一、引用されている古典文（漢文）については、当用漢字にある文字は旧字体を当用漢字に改め、その他については次のように扱った。

a、屈原の諸作品と屈原の影響下に作られたとされる作品群とを集めた『楚辞』については、原文をそのまま引用し、更に下段に訓読を書き下し文の形で添えた。『楚辞』の原文の難解な語については、必要最少限の注を(1)(2)(3)…の番号を付して記した。

b、原著で、文学作品として別格に引用されている古典文（『詩経』など）は、aに準じて同様に扱った。

c、原著で、地の文の中にそのまま引用されている古典文（『春秋左氏伝』など）は、訓読

を書き下し文の形で「」に入れて記し、必要な部分に限って現代語訳を（）内に記した。

d、その他、ごく部分的な古典文・古典語の引用等については、cと同様に扱い、必要な場合に限って(1)(2)(3)……の番号を付して注を添えた。

一、書名、人名、難解語の下には適宜（）内に解説を付した。

二、原著者が現代中国語に訳して引用している古典文については、原則としてそのまま現代日本語訳をして引用した。

一、『楚辞』からの引用については原則として『楚辞章句』（王逸注本）を用いた。

目次

凡
例

一	詩人の降誕と家系	9
二	詩人の生きた時代	15
三	悲劇の生涯	28
四	きららかな詩篇	46
	(一)「楚辞」について	46
	(二)離騷	56
	(三)九歌	114
	(四)天問	133
	(五)九章	140

(六) 招魂	167
--------	-----

五 巨大な影響	174
---------	-----

(一) 屈原以後の「楚辭」の作品	174
------------------	-----

(二) 各時代の作家の育成	185
---------------	-----

(三) 屈原を研究した著作	187
---------------	-----

(四) 永久の記念	192
-----------	-----

一 詩人の降誕と家系

辰陽（湖南省辰溪県）の山中や湘江（湖南省を流れ洞庭湖に注ぐ川）の岸辺を、一人のやつれた面立ちの老人がさまよい歩きながら吟誦していた。その人は、胸に満ちる悲しみと憤りに頭をもたげて天に問いかけるけれど、高く澄んだ青空は答えようとしなない。うつむいて地に問いかけてみても、ひっそりとした大地は押し黙ったまま語ろうとしなない。その人の詩篇は己が出会った不当な仕打ちを訴え、善きものと美しきものへの憧憬、悪しきものと醜いものへの憎しみを吐露している。時の勢いの下、その人にはもはや暗闇を取り除く力が無かったし、またその人は汚れた流れに身を任せることも、かりそめの人生を生きて行くことも望まなかった。苦悩と失意に迫られて、その人はとうとう清らかに澄み切った汨羅江（湖南省湘陰県の北にある川）の中に、我と我が身を投げ入れたのだった。

中国文学史上最初の偉大な詩人は、このように己の生命を熔鋳炉で熔かし鑄て不朽の詩篇を作り出し、輝かしい理想を人々に指し示した。

この詩人は、二三〇〇年ほど前の戦国時代に、長江・漢水流域の楚国に生を享けた。その人

の名を、屈原くつげんという（本名は屈平。原あざなは字）。

『史記』の「屈原・賈生列伝」に拠れば、「屈原は楚国の貴族の出で、楚の王家と同姓である。彼の祖先の屈原くつげんは、楚の武王熊通くまつうの子で、「屈」の地に封ぜられたので、後に屈を姓とした。だから家系のおおもとをとたどれば、屈原と楚王は始祖を同じくしているのであって、その始祖とは、伝説中の古代の天子、顓頊せんぎく高陽氏である。

屈原は莫敖ばくごうの地位に就いた。その子孫である屈重・屈到・屈建くつけんらも、皆莫敖となった。莫敖というのは楚国に特有の官職で、屈原の事績から考えると、外交を担当すると同時に兵権を握って戦争を指揮する、非常に高い地位であった。屈氏の祖先の中にはまた屈完くつかんという有名な人物がいて、斉の桓公かんこうが諸侯を率いて楚を伐とうとした時、その前に召陵しょうりやう（今の河南省鄆城県の東南）に赴いて和平交渉をし（紀元前六五六年）優れた外交を行った。『春秋左氏伝』には、このように記されている。

斉の桓公は屈完を誘って戦車に同乗し、諸侯の軍隊を閲兵して、彼を威嚇して言った。

「このような軍勢で戦いくさをしたなら、誰がいったい防ぎ止められるだろうか。このような軍勢で城攻めをしたなら、どんな城を攻め破れないであろうか。」屈完は答えて言った。「大王がもし徳義によって諸侯をまとめるのなら、服従しない者は無いでしょう。だがもし武力を用いようとなさるなら、その時は、我が楚国は方城山を城壁とし漢水を堀として戦いましょう。そうすればあなたの兵がいくら多くとも、その兵を用いることができなくなる

でしょう。」

これらの言葉には道理がありまた節度があり、卑屈に陥らず高慢になり過ぎてもない。こんな風に諸侯に應對したことから考えるならば、屈原は外交辞令にたくみな人だったと言うことができるだろう。

戦国時代に入ると、屈氏の勢力はやや弱まり、比較的著名な人物には、秦国の捕虜となった大將軍屈原くわんがひと屈原その人がいるくらいである。『惜誦』せきしよ（『楚辞』の篇名で『九章』の中の一つ）の中に、

忽忘身之賤貧 忽たちまち身の賤貧せんびんなるを忘る

という言葉があることから明らかなように、屈原は貴族の身分をまだ保っていたとはいえ、経済的な地位は没落しかかっていた。

屈原の貴族としての出身は、教育を受け豊かな文化的知識を持つ機会を彼に与え、彼が文学を創造して行くための条件を作ってくれた。同時に、彼は楚王と同姓の關係だったことによつて、楚の国を敬慕する心情を普通の人々よりも濃厚につちかった。『離騷』りせう（『楚辞』の篇名）の冒頭に、彼は自分が古代の帝王高陽氏こうやうしの子孫であることを述べて、全天下を統べ治めたこの伝説中の始祖を特別に言挙げことあげしているが、国を慕う誇りと楚国による天下統一の願望の表現で

あると、それは言えなくもない。

屈原の生まれ故郷は、今の湖北省稀陽縣である。古書の記す所に拠れば、そこには屈原に關わりのある遺跡が、たくさん残っている。稀陽は三峽の近くだが、この三峽は風景が美しく珍しいので有名な地である。酈道元（？—五二七）の『水經注』（著者不明の地理書『水經』に、北魏の酈道元が注を付けた書物。四十卷。）は、三峽の風景を次のように描いている。

三峽の七百里の間は、兩岸ともに山また山で、途切れる所が無い。各々の山の峰は互いに重なり合い、太陽と青空を蔽いさえぎって、正午と真夜半でなければ、日も月も見えない。……断崖絶壁の上にはカワヤナギやコノテガシワの木々が生え、飛泉・瀑布がその間に降りそそいでいる。……晴れたばかりの天氣の時や霜の降りた早朝にはいつも、もの寂しい寒気が泉や林をおおう。そうするときと猿が長く声を引いて鳴き初め、こちらでは高くあちらでは低くと鳴き交わす声はあまりにもいたましい。人氣の無い谷はこだまを返し、この哀しい鳴き声をいつまでもいつまでも途切れさせることが無い。

幻想的な風景は、更に美しい神話と結びつき、一つになって、詩人の豊かな想像力に一定の影響を及ぼした。

「屈原・賈生列伝」から判断して、私達は屈原の生きた主要な時期が、楚の懷王（前三二八—前二九九）と楚の頃襄王（前二九八—前二六三）の時代であることを知り得る。『離騷』の、

攝提貞于孟陬兮
惟庚寅吾以降
攝提せつてい 孟陬もうそうに貞しく、
惟これ庚寅こういんに吾われ以て降くだれり

という二句から推計して、一般的には彼の生年は紀元前三四三年から前三三九年までの間のある年の、正月庚寅かのえとらの日であろうと考えられている*。

*中国古代の天文学者は、天を十二の方位（子・丑・寅・卯……）に分け、太歳星（木星）のある方位によって困敦・赤奮若・攝提格などのように名付けた。攝提は攝定格の略称で、太歳星が寅の方位にある天体現象であり、古代人はそれによって年代を記したのである。また屈原の生まれた日の推算は、計算方法に違いがあるため、数年の差異が生ずる。

ちように折良く、屈原の生まれた日は寅年の寅の月の寅の日で、当時はやった「人は寅に生まれる」という言葉の通り、屈原の生まれた日はまさしく「人」の生まれる日に合致する。そういうわけで、彼の父親（呼び名を伯庸はくようという）は、彼のためにとても良い名前を選んでくれた。『離騷』には、次のように言う。

(1) 皇覽揆余于初度兮
肇錫余以嘉名
名余曰正則兮
(2) 皇覽ちみて余を初度はつどに揆はかり
肇はじ（始）めて余に錫たま（賜）うに嘉名かめいを以てす
余に名づけて正則せいそくと曰い

字余曰靈均

余に字して靈均れいきんと曰う

(1) 皇考、亡き父君 (2) 生まれた日

「正則」とは、平らかで正しく、法則とすることができるといふ意味で、「靈均れいきん(均)」といふのは、神の田の意味である。ここで、屈原は彼の名「平」と字「原あざな」の含む意味を分解して説明しているが、それは自己が素晴らしい天賦の資質——「内美」を持っていることを物語るためで、また同時に自己の品性が父の望んだように正直でしかも聡明であることを述べるためである。

屈原は、自己の優れた資質を信じていた。このような天賦の資質に負そむかぬよう、彼は若い頃から学ぶことにつとめ、並はずれた才能をつちかったのだった。詩人は、公正で有用な人間となり、人格的に完全な人間であろうという志を立てた。そして一生涯を通じて、少しも動揺することなく、この目標に向かって進み続けたのである。

二 詩人の生きた時代

屈原は戦国時代（紀元前四七五―前二二一）の中期を生き、活動した。我が国の史学界の一般的な見方によれば、我が国は戦国時代に、奴隸制社会から封建制社会へ移行して行った。

春秋時代（紀元前七七〇―前四七六）以来、中国社会は巨大な変化を経験して来た。奴隸達のうち続く暴動・逃亡、及び自由民層の武装蜂起のうねりという衝撃の下で、奴隸制はもはや維持できなくなつて来ていた。諸侯の国々は、早い遅いの違いはあつても、それぞれ政治・経済制度の改革を進めていた。たとえば、紀元前五九四年、魯国で「初めて敵に税（田畑の広さに応じて税を徴収するのを開始すること）」したのは、土地私有の合法性を承認したことに他ならない。このことは結局、奴隸制社会の土地の国有制が打ち破られ、新興の地主階級が存在が確認されたことであり、奴隸制度の母体の中に新しい封建制度がもうはぐまれ成熟していたことを明示している。春秋時代には、諸侯の国々内部の新旧勢力の闘争もまた非常に激しかった。新興の地主階級を代表する卿・大夫は、長期の闘いを経て、一步一步、奴隸主を代表する公室の権力に取って代つて行った。戦国時代には、齊の田氏が姜姓に取って代り、正式に諸侯に列せられ